



ムツゴロウを殺すな! 諫早湾を殺すな!!

諫早湾に「ギロチン」が落とされてから、2カ月が経つ
国内外からの「水門を開けて!」の声は無視され続け、
干潟ではなんとか生き延びた生き物たちが、水が来るのを待っている。
防災のためと称する堤防は、市民によって何の役にも立たないことが
証明され、「始めたら止まらない」公共事業のボロが出始めた。
政府は「ムツゴロウより人の命が大切」と議論をすり替えるが、
ムツゴロウも人も自然も、すべて大切なのだ。

ムツゴロウの越冬行動「愛のジャンプ」 写真提供/諫早干潟緊急救済本部

自民党政治のツケが まわった諫早湾干拓

山下弘文

四月一四日、諫早湾干拓の一つの工
ボックといえる潮止め工事が強行され
た。なぜか？

一九八九年から始まった七〇五〇メ
ートルの基礎工事は難航を極め、当初
予算の一三五〇億円をはるかに超え、
昨年七月段階で二三七〇億円にまで膨
れ上がった。湾の閉め切りが進み一二
〇メートルが残され、潮流が早くな
ったため従来の工法では施工が困難と
なり、二九三枚の鉄板を一斉に落とす
という新しい工法を編み出した。しか
し、鉄板を支える架台は鉄製で海水に
よる腐食が進み、安全性を考えると、
どうしても六月の梅雨どきまでに閉め

切りたいというのが農水省の考えだっ
た。

一方、参議院予算委員会での有働正
治議員（共産党）の質問などで農水省
はある程度の余裕期間をおかざるをえ
なくなつた。私が閉め切り日を知った
のは一日午後四時過ぎ。有働議員か
らの電話で、「藤本孝雄農水大臣が、要
望に応じて一カ月は延期したがもうこ
れ以上待てない。一四日に閉め切りを
したいと通告してきた」ことを知った。
一四日の閉め切りは周到に計画され
たものだった。地元の記者会見は一日
午後七時に行なつた。翌日は土曜日
で休日。閉め切り当日は世間の注目を
集めていた宮崎勤裁判の判決の日で、
マスコミの扱いも大きくはないだろう
との読みがあつたのだから。

また、三月に諫早市議会に提出した
潮止め見直しを含む防災に関する七本
の請願も継続審議中だった。議会も潮
止めには疑問を持ち、審議した市議会
産業経済委員会も農水省に対して質問
状を出していたが、回答はなかった。
市議会も土曜日のため、対応する時間
がまつたくなかつた。

閉め切り終了後の夜、工事事務所の
幹部たちは慰労会でビールを頭からか

け合つてはしゃぎまわつたという。海
洋工学上画期的な工法を成功させたの
で称賛の声がでると考えていたようだ。
しかし、マスコミは「ギロチン」とい
う言葉を採用した。

愚行を強行した政・官・族

諫早湾開発は、五二年に長崎大干拓
構想として始まつた。有明海全体を閉
め切る開発計画の一部で、当時の食糧
難を背景に米作りが目的だった。だが、
米あまりと減反政策、財政的な問題が
あり有明海総合開発が中止となつたと
き、同時に中止に追い込まれた。

しかし七〇年、当時の久保勲（長崎
県知事は経済浮揚を目的に復活を狙い、
長崎市を中心とする恒常的な水不足を
解消する水資源開発を目的に長崎南部
地域総合開発計画として復活させた。
八二年、この開発も有明海四県漁民（長
崎県・佐賀県・福岡県・熊本県）の大
闘争と自然保護団体の反対の前に中止
に追い込まれた。決断したのは長崎県
出身、当時の金子三農水大臣だった。
金子大臣の考えは従来の地先干拓の
推進と既設堤防の強化だった。中止を
決定したとき、時の構造改善局長が大

次々と目的を変えられて、「何があつ
ても」強行されてきた諫早湾の開発。
戦後・自民党政治は、人類の貴重な遺
産を消滅させようとしている。まず
水門を開放し、政府・長崎県・地元市
民団体などが、解決策をさぐるテー
ブルにつこうじゃないか。

臣を訪ね、農水省の干拓技術者に何と
か仕事を与えてほしいと要望したこと
に応じたもので「農水省の失業対策だ
ね」と語つた。計画は建設省も参加し
防災を主目的とした諫早湾防災総合干
拓事業となり、面積は政治決着により
三五〇ヘクタールに縮小されたが、
起工式には「防災」の名称は消え、単
なる干拓事業となつていた。つまり四
五年間の間に、干拓の目的は米作り↓
水資源開発↓防災↓干拓と四回も変わ
つていたので。

日本の官僚の特異性は「官僚は絶対
に誤りを犯さない。誤っているのは国
民の方」という信念を持つていること
だ。いったん決定した開発計画はテコ
でも動かさず、何が起きても工事は進
めるといふ不可解な習性を持つ。「情
性による開発」と呼ばざるをえない。

諫早湾干拓が戦後公共事業の在り方
の根本を揺るがす大問題に発展してき
たところから政府・自民党・官僚・族
議員が一体となり、「何が何でも排水樋
門は開けない」と危機感をつのらせて
いることは明らかだ。安易な妥協に踏
み込めば、戦後つちかつてきた自民党
政治そのものの崩壊に通じると、真剣
に考えているのだろうか。逆に私たちは、



日本各地から多くの人々が、干潟の生物を救出するために集
まった。泥まみれになってみると、救出には水門開放しか方
法がないことがよくわかる。

戦後民主主義の在り方でのものを問う、
いわば市民革命としてとらえている。

干拓によって失われるもの

私が開発反対の運動にかかわったのは七二年からである。当時、労働組合・革新政党を含めほとんどが賛成の立場に立っていた。諫早地区労務局長だった私は、住民運動でしかこの問題に取り組みることができなかった。亡き芥川賞作家・野呂邦暢さんと「諫早の自然を守る会」を組織し活動を開始したが、あくまで少数派の組織だった。それでも開発を中止に追い込んだ。

干拓事業に変更された後も少数派だった。九一年、日本湿地ネットワークを組織した後、諫早の問題は湿地保護運動を進めている団体の間では知れわたったが、現在のような運動の広がりは見られなかった。

だがギロチンが落ちた後、運動は急速に国内外に知れわたり、あつという間に政治問題になった。マスコミも政治家も、島根県の本庄工区干拓問題は知れわたっていたが、西の果ての諫早干潟で何が起りつつあるのか、九州西部本社版を除いて中央では報道されていないなかった。こうしたマスコミの対応も問題だ。しかし、現在の批判の論理はこれまで蓄積した科学的な知識がそれを支えている。また、農水省が隠していた幾多の極秘報告書を収集できたことも大きな力となった。

問題は地域住民の意識だろう。住民が市民としての自覚を持てるかどうかわれば地域の民主主義が試されている

と考える。

三年間にわたる科学的な調査で、諫早干潟が国内・国際的にもまれにみる生物多様性に満ちた干潟であることが判明した。諫早干潟には三〇〇種以上の底生生物（水域に生息する生物のうち水底に生活する生物）が生息している。特にその主役であるゴカイなどの多毛類が八〇種以上採集されていることは特徴的である。また諫早干潟には、渡り鳥を頂点にした「生き物たちの賑わい」がある。これを生物多様性と呼んでいる。標本の中には多くの新種が含まれている。

昨年公表された「日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状」では、干潟に棲む生物のうち五五種が絶滅寸前であると指摘されている。ハラグクレチゴガニ・アリアケガニ・ムツハアリアケガニ・シマヘナタリ・クロヘナタリ・オカミミガイ・ウミマイマイの七種は、干拓によって絶滅する危険がきわめて高いと指摘されている。諫早干潟干拓によって、底生生物の〇%が絶滅寸前に追い込まれる。

地球環境問題が「焦眉」の急となり国際協力が叫ばれている。日本も国際的に水鳥を保護するラムサール条約加盟国であり、日ソ・日中・日豪渡り鳥など二国間条約にも調印している。また、昨年のラムサール会議で、環境庁も中心となり二〇〇〇年までのシギ・チドリ国際的保護戦略も実施中だ。また、一昨年一〇月、生物多様性国家戦略が閣議決定され、残されている国際的に重要な干潟はラムサール登録指定地にして保護・管理することを決定した。

諫早干潟は「国際的に特に重要な湿地」として日本湿地目録に記載され、国際的に保護の必要性が求められている。諫早干潟を消滅させることは、人類の貴重な遺産を無謀な開発により消滅させることにはかならない。

諫早干潟は最も生産力の高い海域なのだ。一平方キロメートルの干潟から一年間で二・六トンの魚介類の生産力がある。また干潟は、トラフグ・ガザミ・クルマエビなど主要水産物の産卵場、稚魚の生育場で「揺り籠」の役割を果たしている。ちなみに佐賀県漁民の反対スローガンは「泉水海は有明海の子宮。子宮を失ったら有明海の漁業は壊滅する」というものだった。

そして干潟に棲む生物は、人間の排泄する有機物を浄化する強力な力を持つ。アメリカの経済学者の試算によると、干潟の浄化能力を公共下水道建設費に換算すると、一ヘクタール四〇万ドルに相当するという。干潟の持つ浄化能力がいかに大きいかの証明は、浄化作用が失われた閉め切り後の調整池の水質悪化が端的に示している。

水門を開放し、 対策会議の設置を

欧米先進国では、重要な湿地環境の回復が進められている。干拓先進国オランダは、ピースボス国立公園の干拓地で堤防を撤去し、九〇〇〇ヘクタールの湿地の再生を図っている。大規模干拓も中止した。またアメリカのサンフランシスコ湾は、三〇〇〇ヘクタールの干拓地を干潟に回復し、環境教育の場として利用している。イタリアの

ポー・デルタ地帯三万ヘクタールも農民と協議し、漁業と観光で地域発展を図っている。

諫早干潟周辺の先人が実施した地先干拓は自然に逆らわない小規模干拓で、周辺の災害防止・農漁業振興・干潟生態系保全を行なってきた。干潟の「賢明な利用」の典型的な方法だ。いま必要なことは、先人の知恵を十分学び取り、干潟生態系を破壊することなく、多くの人々が永久に干潟を利用するような、干潟利用計画を立案することだろう。

公共事業の見直しがかばれば行財政改革が政治課題となっている現在、典型的な税金の無駄遣いであるこの事業は、即刻見直すことが必要だ。政府および長崎県がまずなすべきことは、二五〇メートルの排水樋門を開放し、干潟を活かしながら、改めて開発構想を再検討することである。

排水樋門開放後、直ちに農水省・建設省・環境庁・地元自治体・住民・自然保護団体などによる対策会議を組織し、同じテーブルにつき、すべての問題を洗い出し、検討を加えることが必要なのだ。

短期に解決するものは直ちに国レベル・自治体レベルで解決を図る。中期・長期にわたる問題はじっくりと話し合い、お互いに知恵を出し合い、最良の方法を探る。それが諫早干拓問題解決の早道である。

.....
やました ひろふみ 一九三四年長崎県生まれ。
諫早干潟緊急救済本部。

ムツゴロウを殺すな!

諫早湾を殺すな!!

「ギロチン」が落とされる前に 警鐘を鳴らせ

一柳洋

「諫早干拓事業の批判報道が目立つようになった。水門が衝撃的に閉まる様子や、泥干潟の中で干からびようとする生物を目の当たりに見て報道頻度が高くなったのかもしれないが、もっと早くから報道をしてほしかった。七年前の着工時フリーのライターであった私は、朝日をはじめ数社の週刊誌に諫早干拓の特集を組んでもらうよう頼んだが、在京マスコミは殆どこの問題に関心を示さなかった。水門が閉まってから大騒ぎするのではなく、もっと早く計画時から問題点を指摘し、警鐘を鳴らすのがジャーナリズムの任務とと思う。(後略)」

これが五月二十五日「朝日新聞」声欄に載った私の投書の前段部分である。後段は東京湾横断道路のムダについての指摘なので割愛するが、その翌々日、「朝日新聞」のコラム、「天声人語」に次のような「反省」文が載った。「本誌声欄(一部地域)に諫早湾干拓報道について厳しい批判が掲載された。水門が閉まってから大騒ぎするのはなく、もっと早く計画時から問題点を指摘し、警鐘を鳴らすのがジャーナリズムの任務と思う」と。投書した方は着工当時週刊誌数誌に諫早の特集を

組むよう働きかけたが(在京マスコミは殆ど関心を示さなかった)と言う。

着工したのは一九八九年秋だが当時の東京発刊の新聞を繰ると、関係記事は殆ど見あたらない。そして今回も水門を閉める前までは東京の新聞テレビの関心は極めて薄かった。本欄ももちろん例外ではない。深く自省する。(中略)答えは、次のようなことではないか。日本では重点がとかく東京に傾きがちだ。好ましくはないがそれが一面の現実。東京の新聞やテレビが伝えて初めて全国の関心を集める例は過去にもあった。残念ながらスタートは遅かったけれど、沸き立つ議論を続けたい。」

マスコミも政党も 同じ穴のムジナ?

私がフリーのライターをしていた当時の顛末を紹介したい。「諫早の写真と記事を掲載させてほしい」と「週刊朝日」に頼み断られ、次に確か「週刊ポスト」で断られた。当時リクルート事件など汚職事件が相次ぎ、公共事業の問題点を突くムードに欠けていたのは事実だが、それでも長良川河口堰問題や宍道湖中海干拓などは在京マスコミもやり玉に挙げていた。



調整池から見た潮受堤防工事。「ギロチン」のようにして閉め切った場所に、巨大なベルトコンベアーと土砂運搬船を投入し、大量の土砂が休日返上で一気に投入された。

同じ根を持つ問題なのに取り上げないマスコミにじれつつ、それならと、当時、消費税パブル票で最大瞬間風速を記録していた社会党に行き、諫早特集を掲載させてくれるように頼んだ。編集者は簡単に希望を認め「月刊社会党」で諫早特集を組み、グラビア八ページと本文記事四ページを掲載させてくれた。「社会党先見の明あり」と少しは思ったが、記事と写真を見て動いた社会党の国会議員はいなかったらしい。わが国では政党もジャーナリズムも問題点を掘り起こしそれをアピールして改革するという精神にかけるところがある。「官僚が悪い。政治家は何をや

計画時から問題点を指摘するのがジャーナリズムである。自らも諫早湾干拓事業に警鐘を鳴らしていた筆者が指摘する。役人や政治家だけでなく、ことが起きてからしか報道しないマスコミの姿勢を変えなくては、何も変わらないのではないか。

っているか」と指摘するマスコミもそう変わらない。ここを認識しないとマスコミ自体の変革も行なえないと思う。「天声人語」は、(残念ながら)スタートは遅かったけれど、沸き立つ議論を続けた」と結んでいる。そう願いたいのが、今のマスコミの体制でそれが可能だろうか。わが国では役人・政治家、この頃では経済界も含めて、問題が表面化すると担当者は「自省の弁」を述べるが数年たつと必ず同じことを繰り返す。理由はシステムを変えず、人だけ変えているからではないのか。

マスコミ界の情報公開度は行政より遅れていると思う。制度を変えるといえば、その一番に国会がある。国会は国権の最高機関で唯一の立法機関であり、その権威は国民に由来する。法律は制度を変えることができるわけだから国民代表の議員にはもっと議員立法率を高めてもらいたいのだが、国民自身にその感覚が希薄だ。「お願い」民主主義ばかりで、政治に対する株主意識を持つ有権者が少ない。

地方記者のぼやき

ところで私は横須賀市議も務めるので地方議会で遭遇する例を挙げ、マス

凱風社

〒112 東京都文京区後楽 2-2-15
tel 03-3815-7633 FAX 03-3815-9510

チャイナ・プリズン

中国獄中見聞録 劉青著 是永駿訳

魏京生とともに80年代中国の民主化要求の先頭に立ち、その後11年にわたって投獄された劉青が、自殺の誘惑に耐えながらその目と体に刻み込んだ獄中生活の実態。生原稿から直接訳出。定価1900円+税

火種

現代中国文芸
アンソロジー

パーマーほか編 刈間/白井/白水/代田訳
天安門事件を経て現代に連なる中国知識人の良心の声を、小説・詩・戯曲・評論・ルポ・随筆・映画・書画など、さまざまなジャンルで収録。香港返還で民主化の火種は再び発火するのか。定価2900円+税

香港ノスタルジア

その社会と映画 上野 彰

はじめて出会った香港は文革の嵐に揺れていた。日本を飛び越えて北米のチャイナタウンへ視座を移すと香港社会の実相が見えてくる。英国領を脱した香港はどこへ行くのか？ 香港映画のメッセージに時代を読む。6月刊 定価1800円+税

基地のない世界を

戦後50年と日米安保 新崎盛暉

沖縄問題の核心は戦後一貫して「基地」であり「安保」であった。戦後沖縄史研究の第一人者・新崎盛暉が、時代と切り結びつつ現在進行中の諸問題を究明する沖縄同時代史第6巻。 定価2200円+税

●沖縄同時代史シリーズ

- 第1巻 世替わりの渦のなかで 1973～1977
- 第2巻 琉球孤の視点から 1978～1982
- 第3巻 小国主義の立場で 1983～1987
- 第4巻 柔らかな社会を求めて 1988～1990
- 第5巻 「脱北入南」の思想を 1991～1992

ムツゴロウを殺すな!

も少なくおまけに頻繁な人事異動で、世間で注目を浴びていることしかやらせてくれない。その中で記者はヒットを飛ばそうとするわけだから、掘り下

干潟のところでどこには天然のカキが小山をつくって生息していた。自ら移動のできないカキは、干潟の生き物たちの中で最初干からびて死んだ。気分が悪くなるほどの騒音を放っている。



諫早湾を殺すな!!

コミの改革を求めたい。横須賀市は米海軍基地もあることから市政記者クラブには新聞六、テレビ一、通信社一の一計八社が加盟している。ところがそのうち二、三社は記者を一年で変えてしまふ。横須賀市は戦前、横浜に次ぐ都市であったこともあり、港湾や保健所、水道局などを持ち、準政令市なみの仕事をしている。そのため部局は一六あり、職員数は現業を加えれば四〇〇〇名を超す。

「それからバカにならないのが夏の高校野球である。七月になると各記者が地方予選会のために本業を放り出さざられ、「国民的行事」に駆り出される。以前なら「読売新聞」はプロ野球専門で「朝日新聞」主催の夏の高校野球など無視していたが、今は売り上げ増に結びつけるために地方版の紙面を大幅にさき記者を駆り出している。市民運動もその間は記者会見ができなくなるほどだ。二年前に「高校野球の取材は

株主感覚の市民運動に

いい加減にしたら。いつ電話しても記者がいなくて困る」と「朝日新聞」本社に電話したところ「遊軍を配置しているから手落ちはない」と強弁していた。この問題を地方記者に聞くと、多くは「高校野球はいい加減にしてほしい」と言う人が多い。

環境問題をやっていて気がつくのは、マスコミ独特の古い思い込みである。環境保護運動は強大な「お上」に對し、か弱い民衆が何とか抵抗しているという構図の記事を書きたがる。確かに役人と対峙する事はあるが、相手は「お上」ではなくパブリックサーバント(公僕)である、主人はこちらだ。今や力をつける環境団体は抵抗から参加へと運動スタイルを変え、行政に自分たちの政策をとり入れさせ始めている。憲法が保障する国民民主権の政治をまさに現実化しているのだが、このスタイルを評価しきれない記者もいる。

数年前、千葉の自然保護団体が三番

いぢやなき ひろし一九五〇年神奈川県生まれ。海洋ジャーナリスト。横須賀市議会議員。

一番のワルは 政治家・族議員だ

北川 石松

いまの日本は、政・官・族が結びついて国と自然を破壊している。諫早湾の干潟問題の最大のポイントは時の為政者・有力な族議員が自然を破壊し続けているということ。私が環境庁長官だったとき長良川の河口堰（三重県長島町）問題に直面したが、今回の諫早湾の干拓にしても、初めに結論ありき、初めに予算ありきで、用途・目的を変更して強行する。そんなことをする役人も悪いが、それを後ろで動かす政治家・族議員のボスが一番悪い。

長良川で 私を脅した金丸信

一九六八年、長良川の河口堰建設が閣議決定（佐藤内閣）されたとき、日本経済は高度成長期で、その目的は中京地域に重化学工業を興すために川の水を工業用水に生かすこと、つまり「利水」だった。ところが石油ショックや節水技術の進歩で、工業用水はいらなくなつた。それでも、いったん決めた公共事業を止めるわけにはいかんと、「川をしゅんせつして堰を作らないと洪水の危険がある」と、目的を「治水」に変更したのである。

そこで私は閣議で（第二次海部内



諫早湾の北側から見た長さ7050メートルの潮受堤防全景。堤防手前の施設は北部排水門で、対岸に近い方には「ギロチン」現場と南部排水門がある。堤防の右側には調整池と広大な干潟が広がる。

閣・九〇年二月二五日）、こう言つてやった。「二年前の閣議決定は、当時の目的・施策・政治から判断したと思ふ。しかし、今日にいたつては、利水の必要はなくなつた。政治は時代に即応した判断をしなければならぬ」とね。そのうえ、佐藤守良国土庁長官（当時）に「堰を作つたら百年の悔いを残す」、綿貫民輔建設大臣（当時）には「万里の長城は観光客が来るが、長良川は百害あつて一利なし」と言つてやつたわ。

そうしたら建設族の元締めだった金

丸信・元副総理（故人）から電話がかつてきた。「閣議決定の重要性がわかつている。大臣でありながら反対するのかわね。私が「環境を守るのは環境庁長官としての職責です」と言うたら、今度は「選挙で落とすぞ」と脅された。決算委員会でも「俗に『金竹小』といわれる者たちが政治を冒瀆している」とぶつてやつたが、次の選挙（九三年）で落選してしまつた。

時代に即応した 政策の転換をすべし

諫早湾干拓も、長良川河口堰と同じように用途・目的が二転三転している。五二年一月に長崎県が「長崎大干拓構想」を発表したときは、農地造成・水資源開発（飲料水の確保）が目的で、諫早湾全体を閉め切つて一万ヘクタールの農地を作る予定だった。ところが減反政策が促進されたり、地元漁民の反対運動が盛んになつた七〇年四月に「長崎県南部地域総合開発事業」として再発足した。八三年に「諫早干拓事業」が決定したときは、干拓予定地は当初の三分の一の規模の三九〇〇ヘクタールになつて、目的も「治水のため」に変わつてた。

当初の農地造成という目的を変えるときは、公に討論する場を作って、いま何をすべきかを論じ合い、再検討する。それが当たり前ですよ。いったん決めた公共事業であっても、時代に即応して政策の転換を図る。それが政治家がなすべき仕事です。橋本内閣は諫早湾の問題をもう一度じっくり見直すべきなんです。是は是、非は非と言えようでなくてはならない。政治が媚びを売るようでは信頼を失います。

そのためには円卓会議なども大いにやつたらいい。長良川の円卓会議は入選が建設省主導で非公開。回数も少なくて格好だけのもので不十分なわまつた。会議の前に「北川長官は長良川のことを何も知らない」と建設省の役人が触れ回つていたくらいだよ（笑）。そういう役人主導ではなく、市民・国民が中心になつて議論すればいいんですよ。時代に即応した政治・政策の大転換ができないと日本は取り残される。何事も「過ちを改むるにははかることなかれ」です。

（聞き手 編集部・平野裕二）

18〜22ページの写真／伊藤孝司

きたがわ いしまつ 一九一九年大阪府生まれ。元自民党衆議院議員、元環境庁長官。